

ハイデルベルク信仰問答より

問 126 第五の願いは、何ですか。

答え 「われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ」であります。
すなわち、今も、なお、私たちにまつわりつく多くの過失や悪を、キリストの血のゆえに、
私たち憐れな罪人に負わせないでください。また、私たちは自分の中にあなたの恵みの証を
見出し、心から隣人を赦すことが、私たちの真実な志であるようにしてください、というこ
とであります。

〔別訳〕

答え 「われらに罪を犯す者をわれらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」です。す
なわち、わたしたちのあらゆる過失、さらに今なおわたしたちに付いてまわる悪を、キリス
トの血のゆえに、みじめな罪人であるわたしたちに負わせないでください、わたしたちもま
た、あなたの恵みの証をわたしたちの内に見出し、わたしたちの隣人を心から赦そうとかた
く決心していますから、ということです。

「われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ」――

この祈りの言葉ほど、私たちの心の奥深くを問うものはないかもしれません。赦し――それは、
人生における最大のテーマの一つです。人は皆、何らかのかたちで心に傷を抱えて生きています。
その多くは、幼い頃に身近な存在から受けた痛みであったり、言葉にできないほど小さなすれ違
いが積み重なった結果だったりします。そうした傷が心の奥底に沈んでいくと、ふとした瞬間に
似たような出来事に触れ、思いもよらぬ怒りや拒絶として噴き出すことがあります。そして気づ
かぬうちに、私たち自身が誰かを傷つける存在になってしまうこともあるのです。このような「負
の連鎖」のただ中にある人間に、主イエスは一つの道を示してくださいました。

この祈りには、私たちが「被害を受けた者」であると同時に「誰かを傷つけてしまった者」で
もある、という**両面の事実**が込められています。赦されたいと思う心と、赦すことの難しさに向
き合う心。そして、どちらも私たちの現実に深く根を下ろしているのです。ここで大切なのは、
「赦すことができたから赦される」のではないということ。むしろ、「赦せない私たち」をも、
神は最初に受け入れてくださった――その事実が、すべての出発点となります。この「無条件の
赦し」は、神の側の深い痛みを伴った決断でした。神は御子イエス・キリストを通して、私たち
の過ちと弱さの代償を担ってくださいました。その十字架こそ、赦しの根拠であり、神の愛の証
なのです。

神にそのように受け入れられた私たちは、少しずつ変えられていきます。「赦せるようになる」
ために、自分を責めたり無理に努力したりするのではなく、神の愛に心を開いているうちに、い

つの間にかこう思うようになるのです。「もしかしたら、あの人のことも赦せるかもしれない」。かつて心の中にあった「こうでなければ赦せない」という条件が、すこしずつゆるみ、相手の“存在そのもの”を、少しだけ受けとめられる心の土壌が耕されていく。これは、人間の努力ではなく、神の愛がもたらす奇跡です。私たちが誰かを赦せるようになるとき、それは神の赦しの深さの一部を自分のものとして感じられたときかもしれません。

この祈りの言葉——「われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ」

そこに込められた神の愛と癒しを、私たちの歩みの中で静かに味わっていただけたらと思います。